

日本におけるスウェーデン体操に関する一考察 —「リング主義」の採用と定着について—

頼住 一昭

保健体育講座

A Study of Swedish Gymnastics in Japan —Analysis of Adoption and Take of “Lingianism”—

Kazuaki YORIZUMI

Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

P.H.リング (Per Henrik Ling, 1776-1839) によるスウェーデン体操は、国民国家形成期の世界各国に紹介・導入され、その数はおよそ50ヶ国近くにもものぼる。

そのなかで、日本の教育界におけるスウェーデン体操の具体的な紹介は、ボストン体操学校などで学んだ川瀬元九郎 (1871-1945) と井口あくり (1870-1931) によってなされたことはこれまでの先行研究の指摘するところである¹⁾。

川瀬は、1892年にアメリカに渡り約7年間の滞在中に医学と体操を学び帰国後スウェーデン体操に関する著書『瑞典式教育的体操法』²⁾と『瑞典式体操』³⁾の二冊を著しこれを紹介した。また、井口は1899年5月に「教育学(体育)研究ノ為三年間米国学ヲ命ス」⁴⁾との辞令を文部省から受け体育を勉強するためにアメリカへ派遣され約3年間滞在し、1903年に帰国した彼女は『各個演習教程』⁵⁾を著したが、文筆活動よりもむしろ講習会を通じて新体操を広めた⁶⁾。こうして、スウェーデン体操は次第に当時の教育現場の関心を集めることとなる。

その後、日本におけるスウェーデン体操の普及・発展は1913年1月28日の文部省訓令第1号の制定により学校体育における統一的な指導方針(「学校体操教授要目」)が提示され教科の中心教材として採用されるなど戦前の日本における学校体育に中心的な役割を果たすこととなる。

ところで、当時日本に紹介されたスウェーデン体操は、その創始P.H.リングの死後、スウェーデン本国において発生したスウェーデン体操の二つの流れの一つであるHj.リング (Hjalmar Fredrik Ling, 1820-1886) やL.M.テルングレン (Lars Mauritz Tärngren, 1839-1912) らを中心として発展した厳格な形式を重んずる「リン

グ主義」(The Lingianism) を主たるものとして紹介・導入されたものであった。

したがって、もう一方のG. ニュブレウス (Gustaf Nyblaeus, 1816-1902) やV.G.バルク (Viktor Gustaf Balck, 1844-1928) らを中心として発展する自然的でスポーティブな要素を盛り込んだ「自然的方法」(The natural method) は結果的に定着するには至らなかった^{7), 8), 9)}。

そこで本稿では、日本におけるスウェーデン体操がどのような経緯で本国における二つの流れの中の一つである「リング主義」的体操が採用され、そして、その後定着するに至ったのかを考察し、日本における当時のスウェーデン体操の特徴について明らかにすることを目的とした。

本論

〈1〉スウェーデン本国における「リング主義」と「自然的方法」について

(1) P.H.リング没後の解釈の分かれ

P.H.リング没後、G.C.I.(Kungliga Gymnastiska Centralinstitutet. 以下「G.C.I.」と略す) 内部は後継者による衝突が生じた。大別すれば「リング主義」を主張する人達と「自然的方法」を主張する人達の二派に分かれ、どちらもそれぞれ共にP.H.リングの考えに基づく主張しているのである。この点については、彼の遺稿集である『体育の一般的基礎』の内容が示すように、P.H.リングは自分の体育について具体的なものを十分明らかにしておらず、体育の原理についてはほぼ全体を示しているが、教材や施設、用具や指導法や指導者、その他の諸問題に関しては未完のままであったことが原因と思われる¹⁰⁾、そのために後継者間での解釈が分かれるという結果になった。

したがって、以下に述べる経緯からスウェーデン本国におけるスウェーデン体操の二つの大きな流れは、その後日本にスウェーデン体操が紹介され、これを導入する際にも結果的にその性格を規定することになるのである。

(2) 「厳格」な体操か、「自然的」な体操か

1839年にスウェーデン体操の創始者であるP.H.リングが没し、G.C.I.の校長職を引き継いだのは彼の教え子であるL.G.ブランティング (Lars Gabriel Branting, 1799-1881)であった。彼は、スウェーデン体操の四つの柱の医療体操に力点を置いていた¹¹⁾。そのため彼が1839年から1862年までの長期にわたってG.C.I.の校長に在任していたことが結果としてその他の分野に対して力が注がれなかったということになり¹²⁾、その後のG.C.I.内部の論議につながっていくことになる¹³⁾。このような中で教育体操を発展させ体系化に努めたのはP.H.リングの息子であるHj.リングであった。しかし、Hj.リングの教育的体操は、個々の運動の生理学的な観点の厳密性を要求するものであり、その保守性を高める結果を招いてしまった。このような考え方が後に「リング主義」と呼ばれることとなる。しかし、当然この考え方に反対する意見も現れることになり、G.ニュブレウスやV.G.バルクらを中心とする「自然的方法」が生まれるのである。この「自然的方法」とは先の「リング主義」とは対比的に、体操にあまり規定を加えるのではなく、動きの自然な方法を強調するものであった。

このような二つの考え方の違いは、P.H.リング没後G.C.I.内部において厳格な形式を重んずる「リング主義」と自然的でスポーティブな要素を盛り込んだ「自然的方法」という二つの主張がぶつかりながら発展する素地になる。

スウェーデンの体育・スポーツ史研究の第一人者であるJ.リンドロツ氏 (Jan Lindroth) はこれらの二つの体操の特徴を以下のように著している¹⁴⁾。

- ・個々の動きの明確な効果は分析され細かく決定されなければならない。
- ・あいまいな効果を持っている動き、あるいは明確に生理的目的を示さないものは望ましくない。
- ・すべての身体教育は非常に器用に、そして調和に基づいたものでなければならない。それは、体のすべての部分がよく修練されているということと同じである。
- ・コントロールされていない、また、孤立しあらかじめ定めることのできない運動の修練は生理学的な観点から無用である。
- ・楽しむことの要素は特に重要ではない。等をあげている。

一方、G.ニュブレウスは、1862年から1887年にかけてG.C.I.の校長であった。彼は先に記した「リング主義」に代わるものを展開させた人物である。同じくJ.リンドロツ氏によれば、箇条書きになされてはいないがG.ニュブレウスの考えの要点については次のようにまとめている。

「システムや方法を念入りに仕上げたというよりは、態度というべきものであり、そして彼の考え方の一部には多くの体操を制限しないということがある。G.ニュブレウスの必須の要素は、いわゆる動きの自然な方法、主に歩、走、跳躍である。また彼は、なによりもランニングを要素とした訓練を好んだ。彼の基準の一つは古代ギリシャの五種競技の形態である」¹⁵⁾。

氏は、G.ニュブレウスの基本的な考えをこのように述べ、また以上のような考え方をG.ニュブレウスは、「自然的方法」と呼んだとしている。しかし、この考え方は後に「リング主義」と対立することとなる。この対立がいわゆる1870年代以降に始まるスウェーデン本国におけるHj.リングやL.M.テルングレンらの主張する「リング主義」とG.ニュブレウスやV.G.バルクらの「自然的方法」の始まりである。

以上のような経緯で発展したスウェーデン本国におけるスウェーデン体操の二つの論議は後に、Hj.リングの後を継いでG.C.I.の教育体操部の主任になったL.M.テルングレンとG.ニュブレウスの後継者で軍隊体操部の主任になったV.G.バルクの二人に引き継がれていくことになり、それ以後スウェーデン本国において以上の二つの主張がぶつかりながら発展することになる。

(3) Hj.リングの「Friskgymnastik」について

19世紀後半からのスウェーデン体操の流れを総合的に検討していくために「リング主義」の動向を知る手がかりを与えてくれるであろう資料の一つとして1874年からSKANDINAVISKA GYMNASTIK LÄRAL-SÄLLSKAPET (スウェーデン体操教師会) によって創刊・出版された“*TIDSKRIFT I GYMNASTIK* (以下、「T.I.G.」と略す)” (体操雑誌) を中心に当時のスウェーデン本国におけるスウェーデン体操の動向について考察する。

「T.I.G.」は、当初年2回、G.C.I.出身の体操指導者向けに発刊された雑誌である。その後、出版回数を増やし1927年から1930年までは年10回、1931年からは毎月発刊されている。当時この編集には、編集長をT.J.ハルテリウス (Truls Johan Hartelius, 1818-1896) とし、L.M.テルングレンやV.G.バルクそしてHj.リングが関わっていた。編集長はその後L.M.テルングレン¹⁶⁾、N.F.セレン (Nils F Sellen, 1859-1932)¹⁷⁾ などに引き継がれている¹⁸⁾。また、その内容は新しい指導指針や年次報告、国内外の新しい情報、書評、本の紹介、死亡

記事など多岐にわたり掲載されている。特にその中でも、P.H.リング以後「リング主義」を発展させ、また「教育体操」の発展・体系化に努めたHj.リングは、創刊以来7年間、合計13回にわたり“*Om friskgymnastiken vid kongl. Gymnastiska Centralinstitutet*” (G.C.I.の健康体操について) という論題で論文を連載している。これは、1874年の「T.I.G.」創刊と同時に開始され、それまでのG.C.I.における彼の30年間を総括するような形で、「Friskgymnastik」(健康体操)が普遍性を持つものであることを示している。

ところで、この「健康体操」という言葉がいつ頃から使い出されたかは今後の課題であるが、この表現はHj.リングが用いる以前の1830年代にはすでにP.H.リングにより「体操を通じての健康」ということで使われている¹⁹⁾。

また、この「健康体操」は教育、軍隊、医療、美的といった四つの体操を整理する概念であり教育体操や軍隊体操よりもさらに大きな概念で位置づけるものであるといわれている²⁰⁾。したがって、それらは学校の生徒達を念頭に置いて整理・配列した教育体操を一步進めて教育目的を超えて生体の各器官に効果をもたらす体操として配列・組み合わせをしたものも包含している。

その指導内容としては、G.C.I.で教える教師は、生徒一人一人に指導がいきわたるような生徒の数をより少ない人数で編成し、定められた時間内で運動することができるようにすること、そしてそれらの体操の指導は脚の運動、腕の運動などというように分類され、それらの運動がそれぞれにやさしい運動から難しい運動へと配列された「進度表」をもっておりそれに従い実施するようにとされている。また、実施する運動には35歳以上、14歳から18歳、12歳から14歳、9歳から12歳といった年齢制限を定めており、熟練者や素質または身体発育に従ってグループを分割し体操を行うようにとされている。そして、それらの体操は基礎のしっかりとした体操であることを心がけ、すべての体操はより新鮮でなくてはならず実施者(若者)を飽きさせない内容、すなわち、動きのテンポに変化のないものは回避し、そして多くの体操の配列が似たものにならないように、また、それらの体操実施はリズムカルで活発な体操と完全休息を兼ね備え、自由な遊びと体操、叱咤激励を上手に使い分けて行うようにとされている。その他に指導者は、生徒を恐れずに厳しい規則を維持するようにし、明確なフォームと正しい順序を厳しくチェックすることなどとされている²¹⁾。

いずれもこれらは後の「DAGÖVNINGAR」いわゆる「体操日課」につながるものと考えられる。それゆえ、G.モーベル(Gustaf Moberg, 1875-?)が指摘するように「健康体操」は「教育体操」と等価であり、しかもこの全体を含むより大きな概念であるとされ、また医

療体操とも両儀的であるともいわれている²²⁾。

なお、この「両儀」の意味は、本来「健康体操」からの観察や経験から生まれたものであるということに起因している。つまり、体操の形式などといった対立関係を示す意味ではなく、「Frisk」と「Sjuk」すなわち「健康」と「医療」といった言葉としての違いを表わしたものであると理解すべきであろう。

(4) 「Friskgymnastik」の概念を用いた時代区分

O.ホルムベルイ(Oswald Holmberg, 1882-1969)は、著書“*DEN SVENSKA GYMNASTIKENS UTVECKLING*”の中で、P.H.リング以後の100年の時代を「Friskgymnastikens utveckling」すなわち「健康体操の時代」としてその時代区分を以下の三つに区分している²³⁾。

- ① 1839年から1882年まで。
- ② 1882年から1907年まで。
- ③ 1907年から1939年まで。

それゆえ、ここで注目されるのは彼の区分には、P.H.リング以後、考え方の違いから生まれたスウェーデン体操の二つの流れである「リング主義」と「自然的方法」について、その対立の記述は一部あるものの、その時代区分までには至らず、それらを「健康体操」の時代という一つの大きなくくり方でまとめていることである。つまり、二つの大きな流れは意識されずに20世紀前半まで概観されているとみることができる²⁴⁾。

(2) 日本におけるスウェーデン体操について

(1) 川瀬と井口によるスウェーデン体操の具体的紹介

以上のような本国における経緯のなか、日本の教育界に初めて具体的にスウェーデン体操を紹介したのは川瀬と井口であることは先述の通りである。

川瀬元九郎は、1892年初夏、医学を学ぶためにアメリカに渡りボストン大学医学部で医療体操としてのスウェーデン体操の効果など約7年間の滞在中に医学と体操を学び、帰国後の1902年には『瑞典式教育的体操』と『瑞典式体操』の二冊を著し出版した。彼は『瑞典式教育的体操』を著すためにH.ニッセン(Hartvig Nissen, 1855-1924)の“*ABC OF THE SWEDISH SYSTEM OF EDUCATIONAL GYMNASTICS*”²⁵⁾を、また二冊目の『瑞典式体操』を著すにあたっては、N.ポッセ(Nils Posse, 1862-1895)の“*THE SPECIAL KINESIOLOGY OF EDUCATIONAL GYMNASTICS*”²⁶⁾をそれぞれ主な拠り所にしたといえる。彼が主な拠り所にしたこれらの著書の内容を検討すると厳格な形式を重んずる内容がほとんどであり「リング主義」と考えられる²⁷⁾。そのため彼が帰国後、日本においてスウェーデン体操を具体的に紹介するにあたってその拠り所とした考えは、次のようである。つまり、従来の学校体育で行われていた普通体操の欠陥を記憶体操と結論し、音楽や号令で一連の体操を間違いなく行うために種目や連続を記憶

させる体操を形式主義と批判し、一つ一つの運動を言葉で示しながら、演習の基本順序に基づいて行うというものであった²⁸⁾。

一方、井口あくりは、1899年5月に『教育学(体育)研究ノ為三年間米留学ヲ命ス』との辞令を文部省から受け体育を勉強するためにアメリカへ派遣され約3年間滞在した。彼女は、アメリカにおいてスミス・カレッジとボストン体操師範学校を中心に体育を学んだと言われ、スミス大学では体操科と生理学を学んだ。彼女の体育教師はG.C.I.で学んだ最初のアメリカ人女性、ベレンソン(Senda Berenson)であり、ここで彼女はスウェーデン体操を学んだと言われている。その後、1903年に帰国した彼女は、女子高等師範学校の国語体操専修科の教授となりスウェーデン体操の指導にのりだし、1906年には『体育之理論及実際』と『各個演習教程』の二冊を著している。しかし、彼女は文筆活動よりむしろ講習会を通じてスウェーデン体操を広めたとみられている²⁹⁾。

こうした二人の活動は以後、スウェーデン体操を日本に普及させ次第に現場の関心を集めることになるが、以上の経緯からも明らかのように日本に具体的に紹介されたスウェーデン体操は、アメリカのボストン市を中心に行われていたものであった。しかし、両者のスウェーデン体操に対する考え方は相違しており川瀬は、生理解剖学的理論を背景とするスウェーデン体操の科学性を強調し、形式化した普通体操に変わる役割を期待して体操学校卒業生によるスウェーデン体操の普及を企画した。それに対し井口は、スウェーデン体操を女子に適した運動法と理解し男子中心の普通体操に変わる女子体操としての普及を目指したのである。しかしながら、両者の基本的な考えは同じであり木村吉次氏は、「演習の順序を“記憶”させて運動を行わせる方法ではなく兵式体操と同じように“号令”を取ることによって生徒を集中させることであった。すなわち、生徒の注意を自己の身体の運動そのものに集中させようとし生徒の精神の集中、緊張を求めた」と述べている³⁰⁾。

(2) 「体操遊戯取調委員会」の設立

1902年以降、川瀬らによるスウェーデン体操の具体的な紹介・推奨は、従来学校体育の中核として発展してきた普通体操の安定性を揺るがず結果を生んだ³¹⁾。

このような不安定を打開するために調査が必要となり1904年10月に沢柳政太郎(1865-1927)を委員長とする「体操遊戯取調委員会」³²⁾が設立され、海外体育事情調査のために永井道明(1868-1950)が1905年12月にアメリカとスウェーデンへ派遣された。

(3) 学校体育をめぐる諸問題

永井が海外事情調査のために出発した1905年の当時

の日本は、相次ぐ戦争により経済界は一段と発達し国民全体を国家至上主義に一本化しきれない状態であり永井が出発する同年に終結を迎えた日露戦争では物資に対する精神の勝利であるという論法が社会教育を支配し、民族自負へと高められたのである。このような中で、戦後政権が交代し再び教育における富国主義が叫ばれたのである³³⁾。

特に体育に関しては、国民教育に対する期待が大きく1905年10月に出された訓令「戦後教育上ニ関シ当局者留意方」において「近時学生生徒ノ体格ハ従前ニ比シテ漸次良好ニ赴クノ傾向アリト雖モ我國民ノ体格ハ尚改善ヲ要スルコト甚切ナルモノアリ教育ノ事ニ当ル者ハ学校ニ於テハ勿論学校外ニ於テモ一層ノ注意ヲ加ヘ益益体育ヲ奨励シ以テ知育徳育ト併進シテ決シテ偏軽スル所ナカラシメンコトヲ要ス」³⁴⁾と示され一層の振興が叫ばれたのである。その後の「体操遊戯取調委員会」の「報告書」においては例えば、遊戯に関しては学校内外で奨励すべき遊戯がいろいろあげられ正課時に於いては、なるべく団体的で簡易なものが選択の基準として示され、競争遊戯(綱引、送球、フットボール、鬼遊など)行進遊戯、動作遊戯があげられ、また季節に応じた種目として遠足、水泳、スケート、ボートなどが奨励された。

しかし、体操に関しては従来二本立てで行われてきた学校体操と陸軍式体操との内容上の整理から問題が生じた。その問題点として岸野雄三は、「兵式体操として行なわれてきた柔軟体操や器械体操は純軍事的訓練ではなく文字通り体操であるから、陸軍系か文部省系かの区別をやめて体操として一括し、兵式体操は教練に改称する意見に一致した。したがって、従来兵式体操に属していた柔軟体操をはじめ、横木、棚、跳下台、梁木、鉄棒、などの器械体操を、戸山学校の支配から文部省側に移しかえ、学校体操と軍事訓練とを明確に区別しようという結論になった。この決定事項を実現するためには文部省のみでは解決できず、当然予測される陸軍からの圧力も生じ現行規定を改正しなくてはならなかった」³⁵⁾と述べている。

また、このような中で陸軍側は、文部省側に「意見書」³⁶⁾を照会している。その内容は、「普通体操ト軍隊体操ト可成接近セシムルコト国民ノ利益ト被認且体操教員ノ補佐ハ勉メテ予備下士官中ヨリ選抜スルコト相成候ハバ便宜不尠被考候間別紙意見書相添此段及協議候也」と記されており、この意見書は文部省に対する強硬な要求であった。即ち、陸軍側の希望は、森文相時代を再現し兵式体操優位に学校体操を統一しようとすることであった。陸軍側は、体操遊戯取調委員会で注目されたスウェーデン体操などは眼中になく、陸軍歩兵操典や体操教範に準拠して学校体操を実施することが最良の方策であると決めつけたのである³⁷⁾。

以上の経緯からも明らかのように、わが国における

学校体育をめぐる問題は困難を続けており永井が帰国するまで一歩も前進していなかったのである。

(4) 永井が見た本国でのスウェーデン体操

このような背景のなかで、永井は海外体育事情調査のために1905年12月にアメリカとスウェーデンに派遣された。

彼は、初めアメリカに約1年半滞在した。しかし、その時に見たアメリカ国内で行われていたスウェーデン体操にはあまり共鳴しなかったようである。その最も大きな要因として考えられることは、アメリカでは主に女子の間にスウェーデン体操が行われていたということである³⁸⁾。このスウェーデン体操を唱導して普及に力を注いだのはヘメンウェ (Mary E. Hemenway) であり、彼女はスウェーデン体操が「女子に適する」ことを主張し、自ら資を投じて教師を聘し、熱心に普及を図ったのである³⁹⁾。このために1889年以来ボストンを中心にスウェーデン体操は発展し、その結果アメリカでは、主に女子の間で行われるようになったと考えられる。しかし、当時の指導者が「リング主義」、「自然的方法」のどちらを意識的に指導、強調したかは不明であり、著された著書の構成などからは、二つの流れをとともに取り入れていることも事実である⁴⁰⁾。それゆえ、永井が見たものを「リング主義」、「自然的方法」のどちらかに色分けすることは難しい。

とはいうものの彼は、その後1907年にスウェーデン本国に渡りG.C.I.で見た体操に関心を示したのである。なぜならば、スウェーデン本国では、陸海軍の将校たちがその訓練にスウェーデン体操の技術を用いていたからである⁴¹⁾。この内容ならば当時の日本に最も適合すると考え、帰国後(1909年1月)にスウェーデン体操を学校体操の基本にする意向を固めたのではないかと考えられる。また、その当時のG.C.I.の校長(1887-1907)は「リング主義」のリーダーであったL.M.テルングレンであった。

時折りしも、日本は日清・日露戦争と続き一層国民教育に期待をかけている時期であった。

(3) 採用されたスウェーデン体操

(1) 「リング主義」の採用

1909年1月に永井は、海外体育事情調査を終了し帰国した。しかし、その当時の日本は先にも記した通り文部省側と陸軍側の意見の違いから学校体操の統一は難航していた。

このような状況を解決するために文部省の委員は戸山学校で陸軍式をまた、陸軍省委員は高師附属高女、女子体操教員養成所などで、永井のスウェーデン体操を視察したりして学校体操統一のためにつとめていた⁴²⁾。永井は「統一案」の趣旨を説明するために数度にわたって戸山学校に赴き、陸軍側委員と戸山学校

教官を前にして、その具体案を示した。その結果、陸軍側は、スウェーデン体操に折れたのである。その経緯について岸野は、「永井道明は世界列強の体育の動向を語り、体操が祖国の繁栄を動機として生まれ、日進月歩を以て改善されていること、軍隊体育に於いてもスウェーデン体操が重視されつつあること、国情に応じてスウェーデン体操にも種々の方法があり、この「統一案」も単なる外国模倣ではなく、真に祖国を愛する精神に出発していることなどを吐露した。その結果、遂に陸軍側は永井道明の案を認めた。“余が至誠奉公の胸中に我が学校の為のみでなく、我が帝国陸軍の為に深く信じて期する所があったからである”という永井道明の述懐の通り、かなり感情化していた軍部に一種の共感を与えたのは、医学的根拠や合理的な考え方ではなく永井道明のいわゆる“至誠奉公”の精神である」⁴³⁾と述べている。

このように永井の考えには「至誠奉公」の思いが強く、したがって、アメリカで見たスウェーデン体操いわゆる主として女子の間で行われていたスウェーデン体操よりも、本国で行なわれていたいわゆる陸海軍の将校達が訓練に用いていたそれに共鳴するものがあったと考えられる。その結果、永井が紹介したスウェーデン体操は、スウェーデン本国における二つの流れの中の厳格な形式を重んずる「リング主義」的性格を有するものになったといえることができる。

以上のような経緯を経て、1913年1月28日に「学校体操教授要目」が制定され、厳格な形式を重んずるスウェーデン体操がわが国学校体操の主流をなすことになる。

(2) 体操中心の教授要目

しかし、簡明この上ない教授要目に対して当時の関係者はその理解を深めるためにこの要目制定に最も尽力した永井の著書『学校体操要義』にその多くを学んだといわれ、彼自身もこの緒言において「本年一月訓令第一号を以て学校体操教授要目を発表せられたり。而して余の懐抱せる意見は、大要其の中に包含せり。余は個人として、自己の意見の大に文部省に採用せられたるを光栄とすると同時に、之れが実施運用に関し、其の責務の極めて重大なるを感ぜずんばならず。是れ余が茲に本書を公にし、敢て愚見を開陳し、以て教授要目運用上の参考に供せんとする所以なり」⁴⁴⁾と著し、本書を公にしてその運用上の参考にすることを述べている。さらに彼は、第二編・「体操」において「体操は身体各部又は全身の要求に応じて、系統的に正しく身体を練習せしむる合理的運動なり。故に身体養成の特別手段たる体育中にありては、最も理想的のものなりとす」⁴⁵⁾と著し、学校体育の中で行われる体操は最も重要であると説いた。

このようなことから、教授要目には直接的表現とし

て表されていないものの、初めて制定された要目が体操中心の要目といわれる一般的性格はこうした背景からも読み取ることができよう。これは学校体育に留まらず、一般の「家庭」体操としても普及した。このような背景において、1917年頃から1913年に制定された学校体操教授要目に対し医学的・解剖学的な立場から再検討し、その学問的根拠に基づいた実際の体操教授の方法の確立を目指したのが、九州帝国大学医学部教授・桜井恒次郎（1872-1928）であった。

(3) 理想としての「合理的体操」の唱導

このような経緯を経てスウェーデン体操は学校体操の中心教材として取り入れられることになる。しかし、以後行われる理論軽視の実際指導に対し医学者から「体育教師は人体の生体解剖の知識なしに指導案を作ることができない」⁴⁶⁾と批判され、人体の医学的知識を基礎として考案した「合理的体操学」のすすめが唱導されるに至る。

その医学者とは、当時、体操の教授理論に大きな影響を与えていた桜井恒次郎である。

桜井は、1917年頃から1913年に制定された要目体操に対し医学的・解剖学的な立場から再検討を行い、体操教材に対する科学的な認識がなければ効果はあがらないことを指摘し、当時の学校体操の実施状況を批判し実践にかなり大きな影響を与えた。そこで彼は学問的根拠に基づいた実際の体操教授の方法確立を目指したのである⁴⁷⁾。

1922年に発行された石丸節夫編『体操講演集』には、桜井の言葉として「私の説へる“合理的体操”とは、どんなものであるかと言ふに、決して私が発見したのも、亦案出したものでもなく、従来も学校で行って居る“瑞典式体操”である。瑞典式の体操も、リング氏が考案してからは幾多の年月を経過して、変遷に変遷を重ねて居るが、然し私の述べる瑞典式体操は、現に瑞典で行って居る、その儘の直訳的なものではない。私のは瑞典式の体操を学問的の立場から研究したもので、謂はば和製の二字を冠した即ち、“和製瑞典式体操”である。ところがこの“和製瑞典式体操”は、運動そのものを、“斯うしたならよかろう”とか“あゝ行つた方がよい”とか、言ふやうな不徹底のことは、決して許さない、飽く迄も学問上からして“斯うせねばならぬ”“斯うすればよい”“斯うしては悪い”と説明することができるのである。実に合理的である。従つて和製瑞典式体操は、学問的に本家本元を凌駕して居る譯である。斯様な理由で、和製の瑞典式体操は、又合理的体操とも謂はれて居るのである」⁴⁸⁾と著されている。

以上のことから、桜井は当時行われていたスウェーデン体操すなわちいくつかの教程を順番に繰り返す形式的・画一的な体操教授に対し、教師自らが児童・生

徒の身体的状態を考慮した教案を書くべきことを主張し、人体の医学的知識を基礎にした「合理的体操」を唱導したのである⁴⁹⁾。

(4) 桜井の「合理的体操」の実際

その後、彼のすすめた「合理的体操」は、講演や演習、学校現場の指導などを通して著しく普及し、学校以外でも「桜井式紳士体操」の名で生活化されていった⁵⁰⁾。

ところで、彼の普及活動の中で特記すべきは、1917年と1921年の二度にわたり「文部省主催師範学校・中学校・高等学校教員等講習会」の講師を務めたことである。なぜなら、文部省が主催するこのような講習会に彼が二度にわたり講師を務めたということは、文部省も解剖生理の必要性を認識していたとみることができるからである⁵¹⁾。

(5) 「リング主義」の再確認

桜井の唱えた「合理的体操」のすすめは、従来のスウェーデン体操に対し、医学的・解剖学的な立場から再検討したものであるといわれる。しかし、彼が体操指導を具体化する際に参考にした理論は、「リング主義」であるL.M.テルングレンの原著『体操指導書』“*LÄROBOK I GYMNASTIK*”⁵²⁾をG.A. Shairerが独訳した“*Lehrbuch der Schwedischen Gymnastik*”に述べられた形式を参考にし従つたものであった⁵³⁾。

したがって、桜井が当時新しい方法と強調しすすめた「合理的体操」は、永井が帰国後わが国に推奨した体操と同じ動きの性質をもつものであり、従来行われていたものの再確認にすぎなかったのである。

もっとも、桜井自身がその当時、参考にした本がスウェーデン本国における二つの流れの一方である「リング主義」であるということを意識してスウェーデン体操を教授したかどうかについては今後の課題であるものの、その影響力が当時の日本のエトスとパトスにどう共鳴していたかは再評価の必要があろう。

いずれにせよ、結果的に従来L.M.テルングレンやHj.リングらによる「リング主義」の方法をより忠実にとらえ直すことであったと考えられる。野々宮氏は、まさにこの点を「桜井恒次郎が新しい方法と強調したものは従来“リング主義”の再確認にすぎなかった」⁵⁴⁾と指摘している。

しかし、桜井による「合理的体操」のすすめは、当時医学界から提唱されたものであり、その意味では大正期において日本の体育現場に科学的（医学的）根拠を求めた功績は大きく、その後の日本における教育現場（体育）に科学研究を求める素地を与えたといえる。

まとめ

以上の経緯から、日本における戦前のスウェーデン体操の特徴は、L.M.テルングレンやHj.リングらを中心とする厳格な形式を重んずる「リング主義」につながるものであったといえよう。

しかしながら、P.H.リング没後のスウェーデン国内においてスウェーデン体操に対する考え方、そして実践方法の違いから生じた「リング主義」と「自然的方法」の違いは先述のO.ホルムベリの時代区分に代表されるように対外的にはあまり意識されずにいたと考えられる。したがって、スウェーデン本国における「リング主義」と「自然的方法」という二大潮流はそれほど新鮮味のあるものとして受け止められていなかったのではないかという捉え方もしてはならない。

さらに、日本では従来の人為的そして形式的な体操に対し、子どもや女性に考慮し、今までとは違った新しい活動内容すなわち自然的でスポーティブな要素をもつ「自然的方法」の流れも実は戦前に紹介されている。

例えば、それらは大谷武一の『新しい体操への道』⁵⁵⁾、二宮文衛門の『エリ・ビオルクステンの学校体操』⁵⁶⁾、二宮文衛門・今村嘉雄・大石峰雄の『体育の本質と表現体操』⁵⁷⁾などをみることにより明らかであるが、この内容は、V.G.バルク以後の流れをくむ「自然的方法」の流れにつながるものであった。ところが、彼らによるその紹介はスウェーデン体操の二つの流れの一つである「自然的方法」とはまったく気付かずにスウェーデン体操とは異なった新体操として理解され、そして紹介されているのである^{58), 59)}。

いずれにせよ、以上のことから明らかなようにスウェーデン体操の日本における採用は本国における二つの流れの中の一つである「リング主義」的の体操が紹介され、さらに、その後における「学校体操教授要目」成立の際に採用され定着したスウェーデン体操も結果的には同じく厳格な形式を重んずる「リング主義」的な体操が主たるものとして紹介・導入されたといえる。

それゆえ、日本におけるスウェーデン体操のイメージも画一的なものになっているといわざるをえない。こうした点から、日本のスウェーデン体操の特徴の一つはこの辺りにあるといえよう。

注及び引用文献

1) 主な先行研究としては以下のものがあげられる。

- ・能勢修一、明治体育史の研究、逍遙書院、1971、pp. 215-228.
- ・岸野雄三・竹之下休蔵、近代日本学校体育史、日本図書センター、1983、pp. 61-64.
- ・木村吉次、川瀬元九郎とH.ニッセンの体操書、中京体育学

論叢、第13巻第1号、pp. 153-189、1971.

- ・木村吉次、日本体育思想の形成、杏林書院、1975年、pp. 200-218.
- 2) 大日本体育會編、瑞典式教育的体操法「岸野雄三監修『近代体育文献集成第I期(第10巻体操Ⅲ)』日本図書センター、(1982)」、同文館、1902.
- 3) 川瀬元九郎、瑞典式体操「岸野雄三監修『近代体育文献集成第I期(第10巻体操Ⅲ)』日本図書センター、(1982)」、大日本図書株式会社、1902.
- 4) 女性体育史研究会編、近代日本女性体育史、日本体育社、1981、p. 105.
- 5) 井口あくり、各個演習教程「岸野雄三監修『近代体育文献集成第I期(第11巻体操Ⅳ)』日本図書センター」、元元堂書房、1906.
- 6) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、p. 62.
- 7) Lindroth, J., LINGIANISM AND THE NATURL METHOD ~ THE PROBLEM OF CONTINUITY IN SWEDISH GYMNAS-TICS 1864-1891. 8th International Congress for History of Sport and Physical Education、pp 23-33.
- 8) Toru N., LINGIANISM AND THE NATURAL METHOD IN JAPAN - ONE SIDED RECEPTION OF SWEDISH GYMNAS-TICS - Proceedings of the HISPA XI, pp. 335-336, 1985.
- 9) 頼住一昭、スウェーデン体操のわが国への受容過程に関する一考察、体育史研究、第9号、pp 3-5、1992.
- 10) 成田十次郎編、体育・スポーツの歴史、日本体育社、1978、p. 36.
- 11) 要約するとスウェーデン体操の体系は、教育体操(Pedagogisk gymnastik)・軍隊体操(Militär gymnastik)・医療体操(Medikal gymnastik)・芸術体操(Ästetisk gymnastik)の四つの領域からなる。
- 12) Lindroth, J., op. cit., 25.
- 13) 中村敏雄編、野々宮徹、スウェーデンにおける外来スポーツの対応、スポーツの伝播・普及、創文企画、1993、p. 52.
- 14) Lindroth, J., op. cit., 26.
- 15) Lindroth, J., op. cit., 27-28.
- 16) 1887年から1907年までG.C.I.の校長を務める。
- 17) 1909年から1924年までG.C.I.の校長を務める。
- 18) *NORDISK FAMILJEBOKS SPORTLEXIKON (VI): FÖRLAGS-AKTIEBOLAGET A. SOHLMAN & CO, (1946), pp. 949-950.*
- 19) P.J. Liedbeck and C.A. Georgii, *GYMNASTIKENS ALLMÄNNA GRUNDER*, GYMNAS-TISKA CENTRALINSTITUTET (1834).
- 20) *NORDISK FAMILJEBOKS SPORTLEXIKON (III): NORDISK FAMILJEBOKS FÖRLAGS AKTIEBOLAG (1940), p. 428.*
- 21) *HOLMBERG, O.: DEN SVENSKA GYMNAS-TIKENS UTVECKLING*, BOKFÖRLAGET NATUR OCH KULTUR (1939), pp. 81-88.
- 22) *NORDISK FAMILJEBOKS SPORTLEXIKON (III)*, op. cit., 428.
- 23) HOLMBERG, O., op. cit., 75-197.
- 24) J.リンドロツ氏も指摘するように、「1900年から1950年頃にかけて、リング体操の起源やその発展などについて実に多くの研究論文が発表されたが、そのほとんどは、大学以外の(たとえば国民学校の)研究者達によってなされたものであり、しかもリングや息子ヤルマールあるいは彼らの体操を独断的に見ている傾向があること、そしてこれに反対する立場をとっていたのが、デンマークの研究者達であったとしている。たとえば、前者のそれは、Westerblad, C. A.やWiberg, A.であり、後者のそれは、Lindhard, J.の弟子であるPrytz, S.などであるという。氏によれば、ナショナルス

ティックな見方から離れ、本格的にリング体操等の研究が再びなされるようになるのは1970年代にはいつてからである」という。(野々宮徹、論壇・リング没後150年後とリング体操研究、ひすば、第9号、p. 4)

- 25) Nissen, H., *ABC OF THE SWEDISH SYSTEM OF EDUCATIONAL GYMNASTICS*, Educational Publishing Company (1892).
- 26) Posse, N., *THE SPECIAL KINESIOLOGY OF EDUCATIONAL GYMNASTICS*, Lee and Shepard Publishers (1894).
- 27) 頼住一昭、前掲書9)、pp. 5-13.
- 28) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、pp. 63-64.
- 29) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、p. 62.
- 30) 木村吉次、日本の近代学校体育に及ぼしたスウェーデン式体操の影響について、学校体育とスポーツ促進運動の歴史～国際体育・スポーツ史東京セミナー報告集p. 74、1979.
- 31) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、p. 72.
- 32) 1904年10月21日に第1回の会合を開き、以来37回の審議を経て1905年11月30日に報告書を呈出した。また、この委員会において当時の学校体育をめぐる基本的な問題が広く討議された。
- 33) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、p. 69.
- 34) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、p. 70.
- 35) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、p. 82.
- 36) 1906年10月4日、寺内陸相より牧野文相宛の書簡。
- 37) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、p. 87.
- 38) 永井道明、体育講演集、健康堂体育店、1913、pp. 53-67
- 39) 同上、p. 66.
- 40) 頼住一昭、前掲書9)、pp. 5-13.
- 41) Toru N., op. cit., 335.
- 42) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、p. 90.
- 43) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、p. 90.
- 44) 永井道明、学校体操要義、大日本図書株式会社、1913、p. 3.
- 45) 同上、pp. 35-36.
- 46) 岸野雄三・竹之下休蔵、前掲書1)、p. 129.
- 47) 木村吉次、前掲書30)、p. 70.
- 48) 石丸節夫編、体操講演集、都村有為堂、1922、pp. 13-14.
- 49) 成田十次郎編、スポーツと教育の歴史、不昧堂出版、1988、p. 82.
- 50) 水野忠文他、体育史概説、杏林書院、1989、p. 276.
- 51) 大熊廣明、九州帝国大学で行われた桜井恒次郎の体操講演・講習について、体育史研究、第7号、pp. 24-36. 1990.
- 52) Törngren, L.M., *LÄROBOK I GYMNASTIK*, Kungl. Boktryckeriet, P.A. Norstedt & Söner, Stockholm, 1905.
- 53) Toru N., op. cit., 336.
- 54) Toru N., op. cit., 336.
- 55) 大谷武一、新しい体操への道、目黒書店、1931.
- 56) 二宮文衛門、エリ・ピオルクステンの学校体操、目黒書店、1933.
- 57) 二宮文衛門共著、体育の本質と表現体操、目黒書店、1933.
- 58) 頼住一昭、前掲書9)、pp. 14-15.
- 59) 頼住一昭、スウェーデンにおける「自然的方法」の展開と「Frivillig Gymnastik」との関係について、千葉体育学研究、第19号、pp. 1-6. 1994.

(2011年9月15日受理)